

## 普及情報7

分類名〔病害虫〕

シアントラニリプロール水和剤（商品名：ベネビアOD）の  
野菜類のアザミウマ類に対する防除効果

宮城県農業・園芸総合研究所

## 1 取り上げた理由

園芸作物栽培において、微小害虫であるアザミウマ類は発見が難しく、薬剤抵抗性も発達しており防除が難しい害虫である。そのような中、新たに開発されたシアントラニリプロール水和剤は、訪花昆虫や天敵にほとんど影響がなく、薬剤ローテーションに組み入れやすい薬剤であり、アザミウマ類防除に十分な効果が認められたため普及情報とする。

## 2 普及情報

1) シアントラニリプロール水和剤はアザミウマ類に対して、対照薬剤のスピノサド水和剤と同程度の防除効果を示す（図1）。

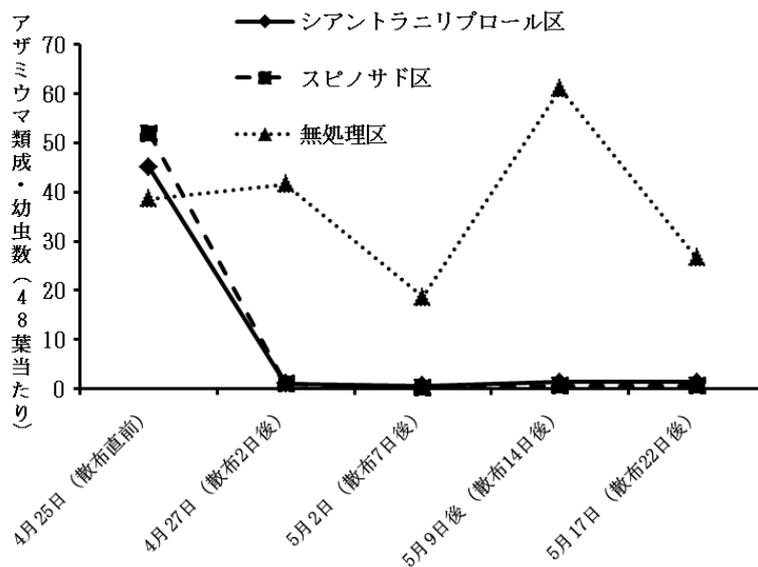


図1 ピーマン上のアザミウマ類に対するシアントラニリプロール水和剤の防除効果

試験場所：農園研内ビニルハウス 品種：京ひかり

シアントラニリプロール水和剤：ベネビア OD, 2000 倍希釈液

スピノサド水和剤：スピノエース顆粒水和剤, 5000 倍希釈液

散布日：平成28年4月25日 値は各3反復の平均値

2) シアントラニリプロール水和剤を散布したピーマンはアザミウマ類の葉への加害がほとんど見られないが（図2），無処理区では成長点の心葉に奇形が多く見られる（図3）。

3) 農薬登録例を以下に示す。アザミウマ類以外にも広範囲な害虫に効果を示す。

- キュウリ：ウリノメイガ，コナジラミ類，アブラムシ類，ハモグリバエ類，アザミウマ類
- トマト：オオタバコガ，アブラムシ類，コナジラミ類，ハモグリバエ類
- ネギ：シロイチモジヨトウ，ネギアザミウマ，ネギハモグリバエ
- イチゴ：ハスモンヨトウ，アザミウマ類，アブラムシ類，コナジラミ類
- キャベツ：コナガ，アオムシ，ヨトウムシ，ハスモンヨトウ，ウワバ類，オオタバコガ，アザミウマ類，アブラムシ類

- f 使用方法 a) 使用時期：収穫前日まで  
b) 使用回数：3回以内（シアントラニプロロールを含む農薬の総使用回数は4回以内）  
c) 使用濃度：2,000～4,000倍 d) 処理方法：散布

### 3 利活用の留意点

- 1) ミカンキイロアザミウマ，ネギアザミウマ，アザミウマ類幼虫が発生し，発生量は中発生程度の条件下で試験した。
- 2) 害虫発生初期のタイミングで散布すると防除効果が高い。
- 3) 本剤は農薬の有効成分をオイルベースの液体に分散した新しい製剤（OD：Oil Dispersion，油性懸濁）で浸透性と残効性に優れ，展着剤を加用する必要がない。ねぎ以外の作物に使用する場合，展着剤を加用すると薬害が生じる場合があるため，加用を避ける。
- 4) 他の薬剤と混用する場合にはTPNを含む農薬，ストロビルリン系の薬剤を含む農薬および銅剤との混用は薬害を生じる恐れがあるため混用しない。
- 5) 訪花昆虫，天敵への影響はほとんど認められないが，ミツバチは直接薬液がかかると影響がでる恐れがあるため，散布の際はミツバチ及び巣箱に薬液がかからないようにする。また，散布直後から1日後まではミツバチを散布区域外に移動させるか，巣門を閉じる。
- 6) 本剤はジアミド系殺虫剤である。抵抗性発達の情報は未確認であるが，抵抗性の発達を防ぐため他系統剤とのローテーション防除に努め，連用を避ける。
- 7) トマトに使用する場合，ストロビルリン系薬剤を含む農薬を散布した場合には，散布後2週間以上間隔をあけてから本剤を使用する。

（問い合わせ先：宮城県農業・園芸総合研究所 園芸環境部 電話 022-383-8246）

### 4 背景となった主要な試験研究

- 1) 研究課題名及び研究期間  
農生態系内の生物多様性向上による総合的病害虫管理技術の開発（平成28年）
- 2) 参考データ



図2 シアントラニプロロール散布区



図3 無処理区

- 3) 発表論文等
  - a 関連する普及に移す技術  
スピネトラム（商品名：ディアナSC）のイチゴ，ナス，花き類などのアザミウマ類，トマトなどのコナジラミ類に対する防除効果（第87号普及情報）
  - b その他 第70回北日本病害虫研究会でポスター発表
- 4) 共同研究機関 なし